高松市埋蔵文化財調査報告　第165集

香西分団消防屯所整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平賀下遺跡

2015年12月
高松市教育委員会

例　言

1　本書は、香西分団消防屯所整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、高松市香西北町に所在する平賀下遺跡の調査報告を収録した。

2　発掘調査地及び調査期間、調査面積は次のとおりである。

　調査地　　高松市香西北町

　調査期間　平成26年7月14日～7月25日

　調査面積　250㎡

3　発掘調査及び整理作業は 高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課非常勤嘱託職員中西克也及び杉原賢治が担当し、同文化財専門員高上拓が補助した。

4　本報告書の執筆は、第1章第1節を高上が、第2章は中西が、それ以外は杉原が担当し、編集は杉原が行った。

5　発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係諸機関並びに方々から御教示・御協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。

香川県教育委員会　香川県埋蔵文化財センター　香西コミュニティセンター　塩井敏治（萬徳寺住職）順不同・敬称略

6　発掘調査で得られた資料は高松市教育委員会が保管している。

凡　例

1　本報告書の挿図として、高松市都市計画図2万5千分の1「五色台」「高松市北部」「高松市南部」「白峰山」を一部改変して使用した。

2　標高は東京湾平均海面高度を基準とし、方位は座標北を表す。これらの数値は国土座標系第Ⅳ系に従った。

3　本報告書で用いる遺構の略号は次のとおりである。

　SA：柵列　SD：溝　SE：井戸　SK：土坑　SP：ピット

4　挿図の縮尺は、遺構の平・断面図が1/40、出土遺物の実測図は1/4を基本とする。

5　遺物の写真撮影業務は西大寺フォトに委託した。

6　土層及び土器観察の色調表現は、『新版　標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。

7　報告書の中の遺構の記載にあたっては、出土遺物が図化できた遺構を中心に記述しており、本文中に記述していない遺構は文末の一覧表に規模等を表記した。

本文目次

第1章　調査に至る経緯と経過
　第1節　調査に至る経緯……1
　第2節　調査の経過……1
第2章　地理的・歴史的環境
　第1節　地理的環境……1
　第2節　歴史的環境……2
第3章　発掘調査の概要
　第1節　確認調査……4
　第2節　調査方法……4
　第3節　基本層序……4
　第4節　調査の成果……6
第4章　まとめ
　第1節　発掘調査結果……15
　第2節　香西浦復元案から考える平賀下遺跡……15

挿図表目次

第1図　平賀下遺跡位置図……1
第2図　周辺遺跡分布図……3
第3図　試掘トレンチ配置図・土層断面図……4
第4図　調査地平面図……5
第5図　SA1 平・断面図・遺物実測図……6
第6図　SA2 平・断面図……6
第7図　SD4 平・断面図・遺物実測図……7
第8図　SD5 平・断面図……8
第9図　SK1・2・4・5・7 平・断面図……8
第10図　SK1・2・4・5 遺物実測図……9
第11図　SP1・6・7・10・18・21・31・33・36・39・41・42・45 平・断面図……11
第12図　SP1・6・10・18・21・36・39 遺物実測図……11
第13図　SP41 遺物実測図……12
第14図　精査遺物実測図……12
第1表　検出遺構一覧表……13
第2表　出土遺物観察表……14

写真図版目次

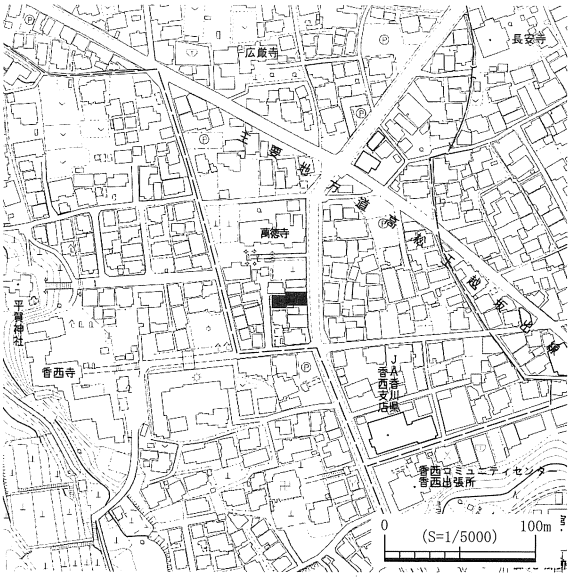
図版1　調査区全景（東から）
　調査区全景（西から）
図版2　土層壁面 A-A′
　土層壁面 B-B′
　SA1・SA2 完掘状況
　SA2-1 完掘状況
　SD4 完掘状況
　SK1 完掘状況
　SK2 半裁検出状況
　SK5 完掘状況
図版3　SK6 完掘状況
　SP41 完掘状況
　SP45 完掘状況
　遺物写真1
　遺物写真2

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

本調査地は、香西分団消防屯所建設予定地にあたる。本市消防局（以下消防局と呼称）により、当地での消防屯所建設事業が計画されたため、文化財課が着工に先立ち平成 26 年 4 月 15 日・6 月 12 日に試掘調査を実施した。その結果、中世～近世を中心とした時期の埋蔵文化財の包蔵を確認したため、香川県教育委員会に報告したところ、周知の埋蔵文化財包蔵地「平賀下遺跡」として登録された。

平成 26 年 6 月 24 日付けで消防局から埋蔵文化財保護法第 94 条第 1 次に基づく発掘通知が提出され、本市教育委員会から県教育委員会へ進達したところ、7 月 8 日付けで「発掘調査」の行政指導があった。これを受けて文化財課は消防局と協議を行い、工事着手前に発掘調査を実施し、記録保存を行うことで合意したため、本市文化財課は平成 26 年 7 月 14 日から同年 7 月 25 日にかけて、発掘調査を実施した。



第１図　平賀下遺跡位置図（S=1/5000）

第２節　調査の経過

発掘調査は、平成 26 年 7 月 14 日より開始した。14 日及び 15 日に調査範囲の全面を重機により遺構検出面である地山まで掘削した。その後、人力による遺構検出作業を行い、溝や土坑・柱穴を検出した。15 日～ 23 日に遺構掘削を行い、土層断面図及び平面図を作成した。柱穴に関しては埋土を確認し写真撮影を行った。24 日に遺構完掘状態の全景と、個々の遺構の写真撮影を行った。25 日に遺構平面実測図を作成し、調査を終了した。その後、平成 27 年 4 月 1 日から遺物洗浄・接合復元・実測・トレースを行った後、6 月末から執筆編集を行い 12 月末に報告書を刊行した。

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

瀬戸内海が北面する香川県のほぼ中央に位置する高松平野は、西側を五色台山塊、東側を立石山地に囲まれた東西 20km・南北 16km の広さである。平野部には讃岐山脈に源を発する新川・春日川・詰田川・香東川・本津川等の河川が瀬戸内海に流れ込んでいる。

東西の山塊は花崗岩塊の頂部に浸食を受けにくい安山岩が被さり、浸食解析から取り残されて山となったものである。一般に頂部が平坦な卓上台地の場合をメサ、円錐形の独立丘となった場合をビュートと呼ぶ。いずれも讃岐平野に見られる特徴的な山で、屋島や五色台はメサの代表例である。

洪積世に入ると本津川、香東川や春日川をはじめとする河川の堆積作用により高松平野が形成された。香東川は県内第 2 位の河川であり、その堆積力は平野形成に大きな影響を及ぼしている。かつて石清尾山塊を挟んで東と西の流れがあったが、寛永年間に生駒藩の奉行であった西嶋八兵衛が現状のように西側に流れを一本化した。

五色台山系の東麓は顕著な開析谷が発達しておらず、裾近くの緩傾斜面は水田もしくは畑地として利用されている。本遺跡の所在地も以前はブドウ畑として使用されていた。緩傾斜面の東側には本津川の氾濫原で三角州が広がる。平賀下遺跡は五色台山系の勝賀山東麓に広がる緩傾斜面に接する海浜部に位置し、標高 3.5m 前後の所にある。

第2節　歴史的環境

高松平野西部において最も古い人間の営みが検出されたのは、中間西井坪遺跡、中森遺跡、香西南西打遺跡であり、旧石器時代後期に属する石器群が見つかっている。

縄文時代になると、香西南西打遺跡で草創期と考えられる有舌尖頭器が出土し、西打遺跡では旧河道から前期末の土器及び石器が、鬼無町佐料では後期の土器が採集され、鬼無藤井遺跡では自然流路から晩期の土器が出土している。

弥生時代になると、鬼無藤井遺跡では最大径約70ｍの規模を誇る二重の環濠を巡らす前期の環濠集落が検出されている。後期の遺跡としては、西打遺跡で竪穴建物跡と掘立柱建物跡、中間西井坪遺跡で掘立柱建物跡と土器棺墓、佐料遺跡で多量の土器が出土した溝が検出されている。

古墳時代になると、東方の石清尾山塊には前期初頭の鶴尾神社4号墳をはじめ、前期に属する双方中円墳や前方後円墳といった積石塚が築造される。平野の西部では、中間西井坪遺跡で周溝を持つ前期古墳が3基確認されている。中期では、平野西部で最大規模の前方後円墳である今岡古墳があり、前方部から土製棺が出土している。ほぼ同時期の中間西井坪遺跡で埴輪や土製棺が製作・焼成されていることから、その土製棺が今岡古墳に供給されたと推測されている。後期になると、横穴式石室を主体部とする群集墳の築造が盛んになる。五色台山系東麓の緩傾斜面には、古宮古墳、鬼無大塚古墳、平木1号墳などの巨石墳からなる神高古墳群が形成される。また、石清尾山塊南の浄願寺山の山頂付近には横穴式石室をもつ50基余りの群集墳である浄願寺山古墳群が形成される。

古墳に替わり寺院の造営が盛隆になると、平野部には川原寺式が退化した瓦当文様を持つ軒瓦が出土する遺跡として、白鳳期の創建と推定される坂田廃寺と勝賀廃寺が知られている。坂田廃寺近くにある平安時代中期創業の片山池1号窯跡は坂田廃寺に瓦を供給していたと考えられる。

奈良～平安時代にかけては、正箱遺跡、薬王寺遺跡から総数50棟以上の掘立柱建物跡が検出されている。また、区画溝や掘立柱建物跡の中には条里地割と方向が符合するものがあり、南海道に近接する当該地区では早くから条里地割の施行が進んでいたことがわかる。香西南西打遺跡では粘土採掘坑を多数検出しており、土器製作集団の存在が考えられる。なお、藤尾城跡の北西にある香西寺には重要文化財の毘沙門天立像を所蔵しており、像は平安時代のものとされ、当該地区が古い歴史を持っていたことを証明している。

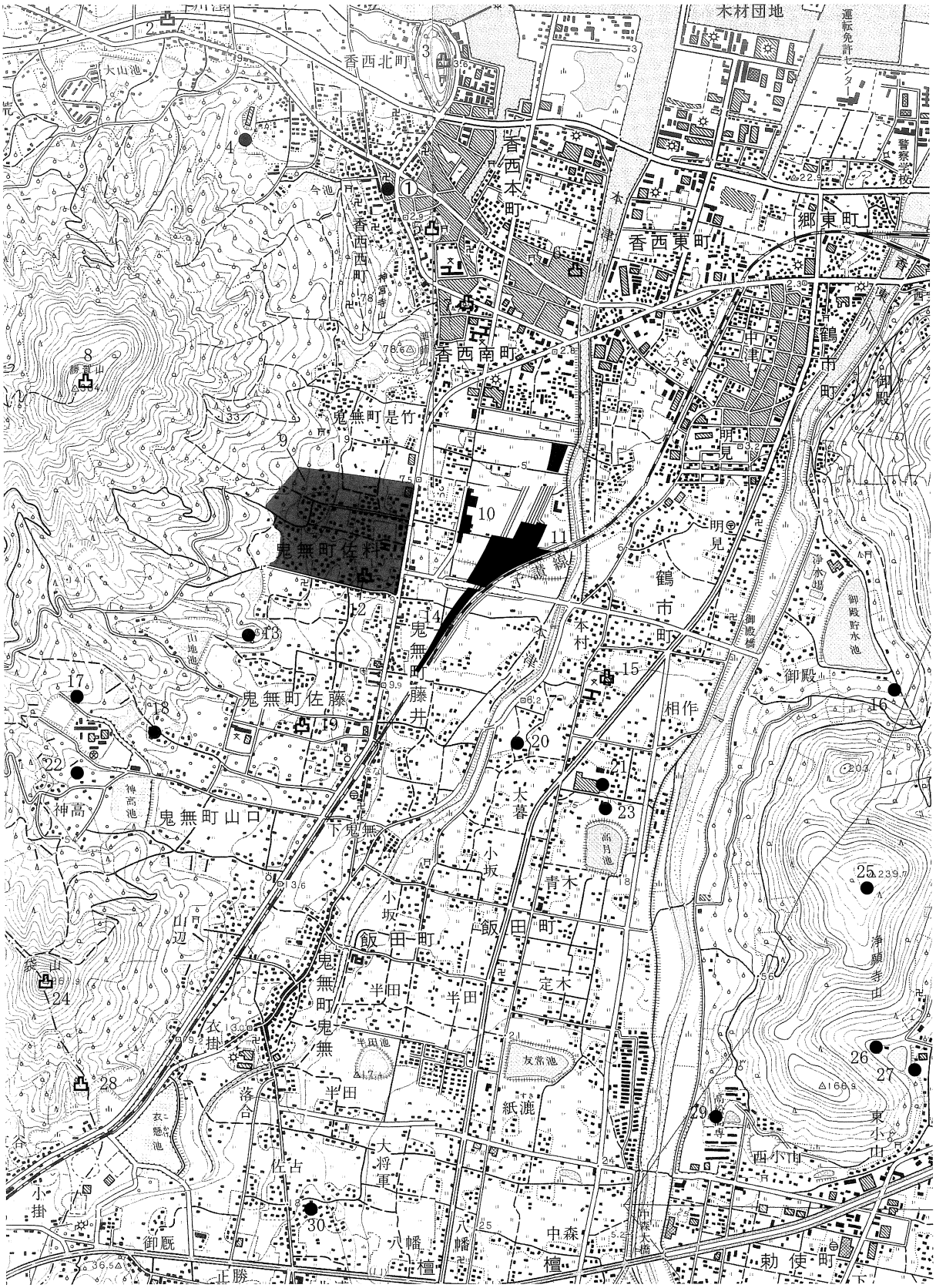
鎌倉～室町時代でも条里地割に符合する溝跡が、鬼無藤井遺跡や香西南西打遺跡、西打遺跡で広範囲に検出されている。さらに、西打遺跡では区画溝に囲まれた鎌倉時代の屋敷跡、香西南西打遺跡ではコの字状の区画溝が確認されている。

文安2年（1445）の『兵庫北関入舩納帳』には、香西の記載があり、香西から小麦や米・豆などを載せた船が兵庫津に入港していた記録が残る。

当該地域は中讃地域を掌握していた香西氏の本拠地である。『南海治乱記』に「居城ハ笠居郷佐料也、要城ハ勝賀ノ山也」と記されるように、香西氏は勝賀山に有事の際に城として勝賀城を築き、常には佐料城を居館とした。戦国時代末期の天正5年（1577）には、香西氏は本拠地を佐料城から香西浦近くの藤尾城に移している。

勝賀城の周囲には亀水城、黄峰城、芝山城、作山城、鬼無城等の支城を築いている。筑城城・飯田城・檀紙城・堂山城などの香西氏に従った在地の領主たちの居城が、支城群を取り囲むように香川郡や阿野郡に点在しており、その数は一説には40余にのぼったという。また、飯田町や檀紙町にある多数の塚の中には中世の「武将の墓」という言い伝えが残るものもある。

羽柴秀吉による四国平定以後、生駒親正が讃岐一国を支配し、高松城を築く。江戸時代に入ると、高松城主は生駒家から松平家に変わり、明治維新を迎える。薬王寺遺跡や鬼無藤井遺跡では江戸時代の庶民の墓や屋敷跡が検出されている。



①平賀下遺跡　2 植松城跡　3 芝山城跡　4 勝賀廃寺　5 藤尾城跡　6 本津城跡　7 作山城跡
8 勝賀城跡　9 佐料遺跡　10 香西南西打遺跡　11 西打遺跡　12 佐料城跡　13 今岡古墳
14 鬼無藤井遺跡　15 筑城城跡 16 御殿貯水池南遺跡　17 平木 1 号墳　18 鬼無大塚古墳　19 佐藤城跡
20 王墓古墳　21 相作牛塚古墳　22 古宮古墳　23 相作馬塚　24 鬼無城跡　25 浄願寺山古墳群
26 片山池窯跡群　27 坂田廃寺　28 衣掛城跡　29 がめ塚古墳　30 御厩大塚

第2図　周辺遺跡分布図(S=1/25000)

第３章　発掘調査の概要

第１節　確認調査　（第３図）

平成26年４月及び６月に実施した確認調査では、調査対象地の北側に東西方向の第１トレンチと第２トレンチを、南側にも同様に東西方向の第３トレンチと第４トレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。

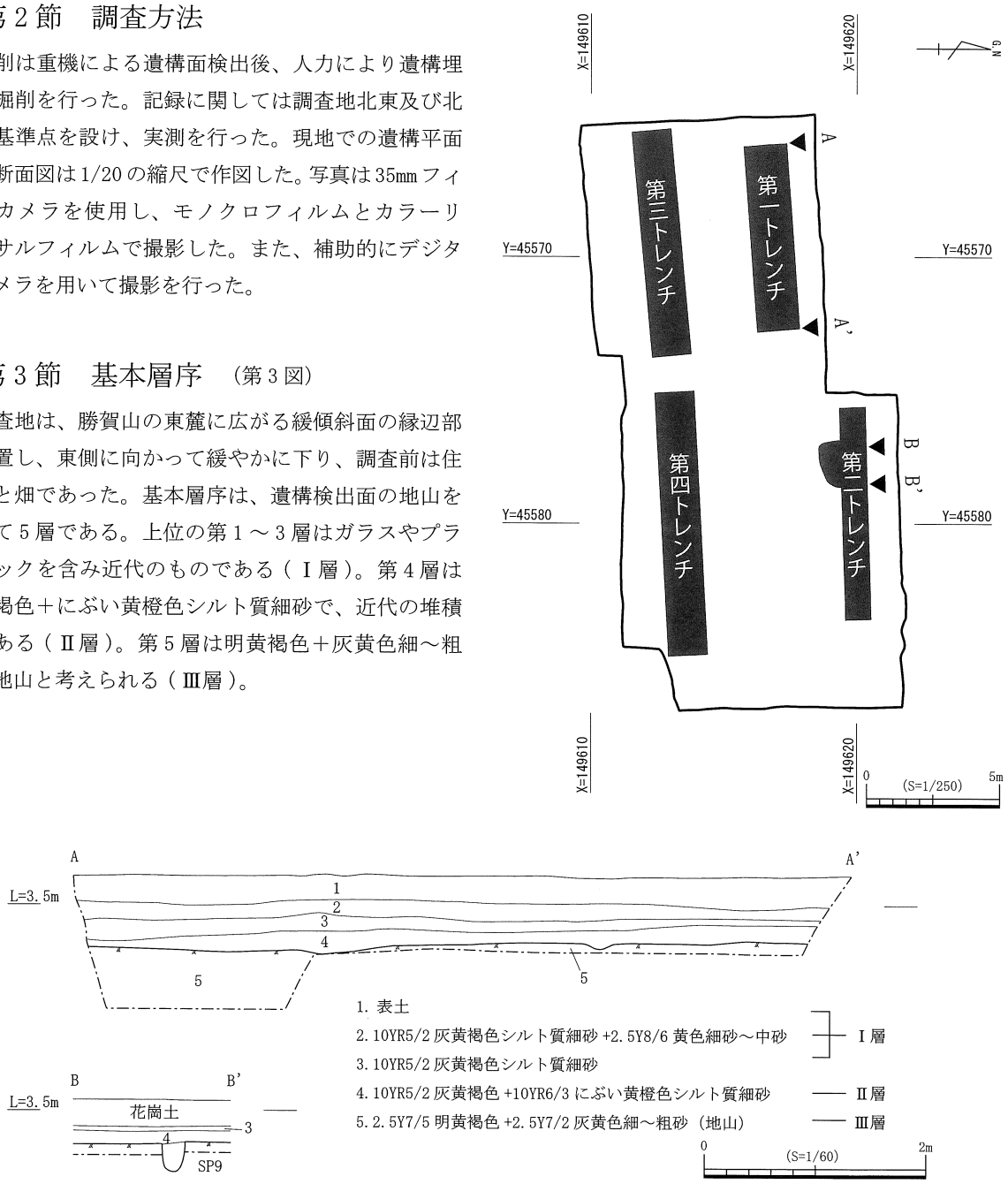
各トレンチにおいて複数の遺構を確認した。第１トレンチではピット８基、性格不明遺構１基を検出した。第２トレンチではピット５基、土坑２基を検出した。第３トレンチでは、ほぼ直線上に並ぶピット３基を検出した。第４トレンチではピット３基、土坑１基、近代の溝・土坑を検出した。出土遺物は、中世のものと考えられる土師質土器や近世の陶磁器などであった。この結果、事業対象地を周知の埋蔵文化財包蔵地と認定し、「平賀下遺跡」と命名した。

第２節　調査方法

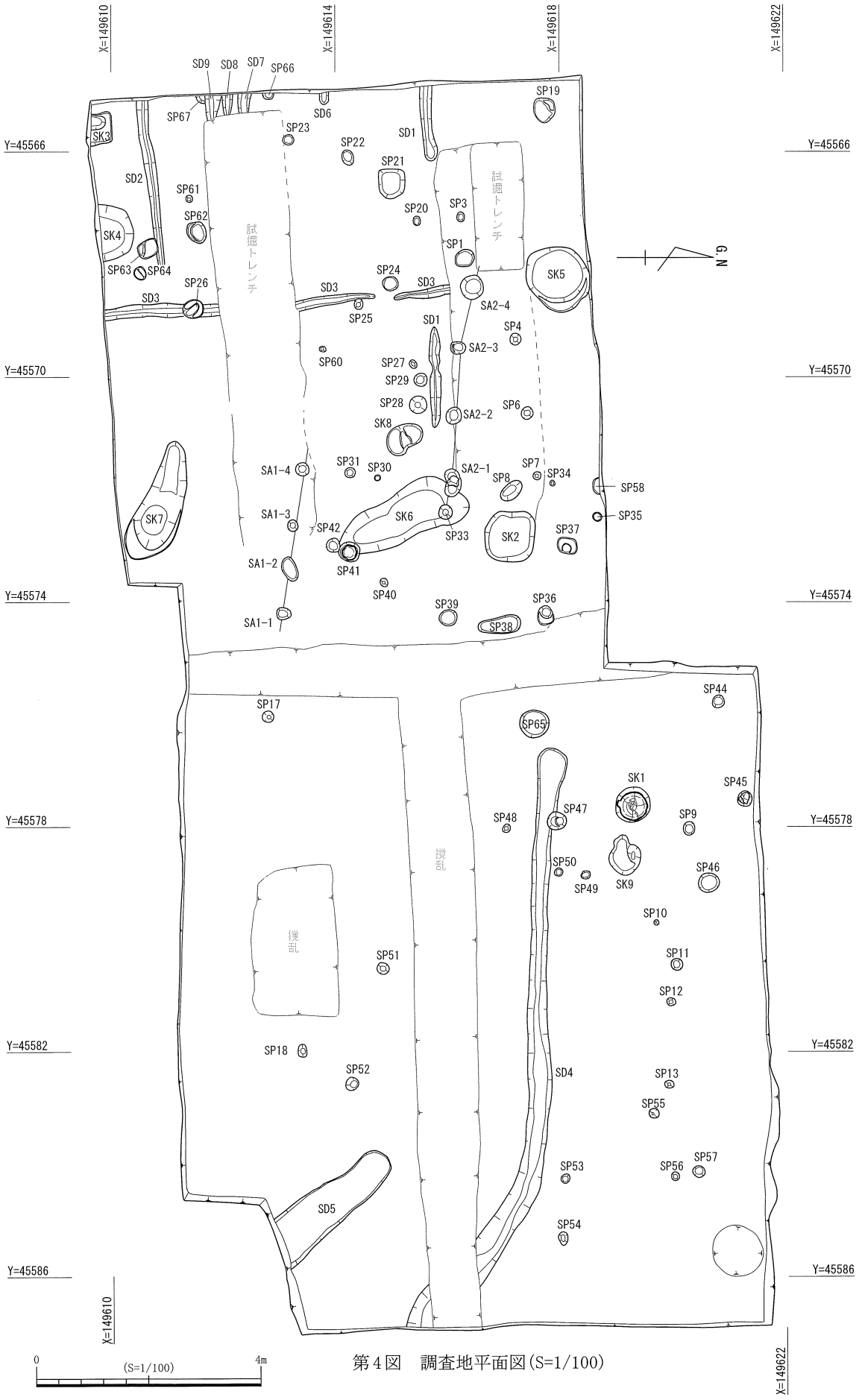
掘削は重機による遺構面検出後、人力により遺構埋土の掘削を行った。記録に関しては調査地北東及び北西に基準点を設け、実測を行った。現地での遺構平面図と断面図は1/20の縮尺で作図した。写真は35mmフィルムカメラを使用し、モノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムで撮影した。また、補助的にデジタルカメラを用いて撮影を行った。

第３節　基本層序　（第３図）

調査地は、勝賀山の東麓に広がる緩傾斜面の縁辺部に位置し、東側に向かって緩やかに下り、調査前は住宅地と畑であった。基本層序は、遺構検出面の地山を含めて５層である。上位の第１～３層はガラスやプラスチックを含み近代のものである（Ⅰ層）。第４層は灰黄褐色＋にぶい黄橙色シルト質細砂で、近代の堆積層である（Ⅱ層）。第５層は明黄褐色＋灰黄色細～粗砂で地山と考えられる（Ⅲ層）。



第３図　試掘トレンチ配置図(S=1/250)・土層断面図(S=1/60)



第4図　調査地平面図(S=1/100)

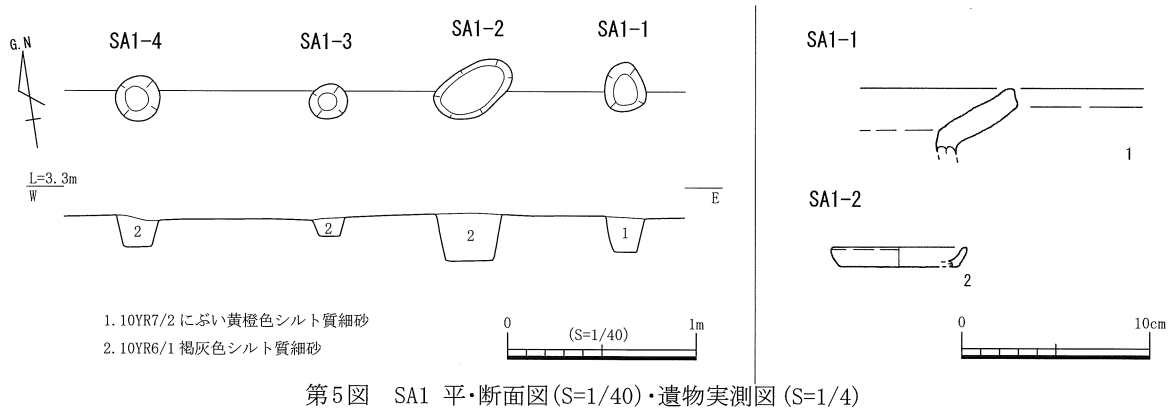
第４節　調査の成果

SA1　（第５図）

調査区中央において検出した柱穴列である。柱穴は４基からなり、主軸方位はＮ－11°－Ｅで柱穴の間隔は2m前後である。柱穴列を構成する柱穴の平面形態は、直径18cm～44cmの円形もしくは楕円形で、深さが10cm～23cmであり底面レベルは一定していない。遺構埋土は、一部にぶい黄橙色シルト質細砂もあるが、褐灰色シルト質細砂が基本である。

図化できる遺物は２点出土した。図５の１はSA1-1から出土した土師質土器の甕である。口縁端部はやや丸みを持っている。器面調整はナデが施されている。13世紀以降のものと考えられる。２はSA1-2から出土した土師質土器の皿で、内弯傾向が強く立ち上がる短い口縁を持つ。『高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』様相５皿ＡⅥ形式と考えられることから、18世紀前半のものである。出土遺物や埋土の土質や単一埋土であるなど周囲の遺構とほぼ同じことから、18世紀頃の遺構と考えられる。

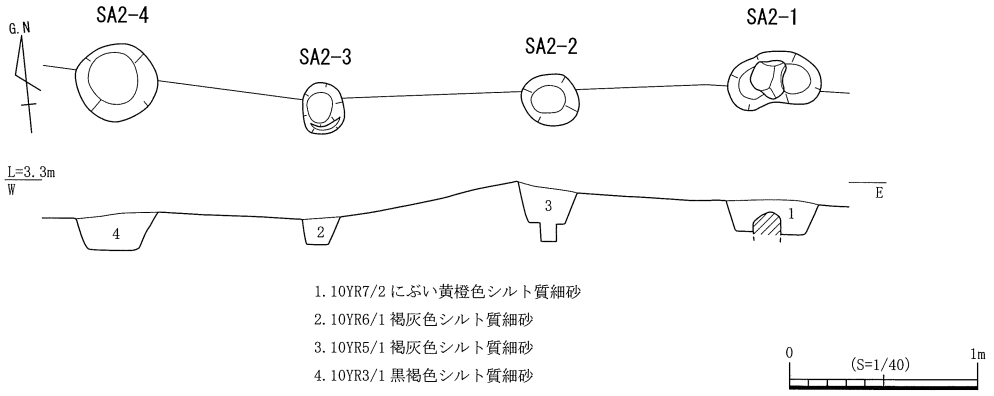
SP17・SP22・SP60がSA1の延長上に所在するが、SP60は大きさが極端に違い、SP17・SP22は柱穴間隔が大きく異なる。また、周囲に掘立柱建物になりうる適当な柱穴がないことから、現段階においては４つの柱穴からなる柵列と考えられる。



第５図　SA1 平・断面図(S=1/40)・遺物実測図(S=1/4)

SA2　（第６図）

調査区中央において検出した柱穴列である。柱穴は４基からなり、主軸方位はＮ－5°－Ｅで柱穴間は3m前後で均等である。柱穴列を構成する柱穴の平面形態は、直径22cm～50cmの円形もしくは楕円形で、深さが15cm～31cmであり底面レベルは一定していない。遺構埋土は、にぶい黄橙色シルト質細砂及び褐灰色シルト質細砂及び、黒褐色シルト質細砂で一定していない。SA2-1の底面には根石と考えられる石がみられた。遺物は出土しておらず、時期は不明である。SP1・SP3・SP33・SP39もSA2の延長として検討したが、ピットの大きさ及び柱穴間隔が3m以上になり異なる。また、周囲に掘立柱建物になりうる適当な柱穴がないことから、現段階においては４つの柱穴からなる柵列と考えられる。



第６図　SA2 平・断面図(S=1/40)

SD1・2・3・6・7・8・9

調査区北西において検出した溝である。幅及び深さは、第1表のとおりである。遺構埋土は不明である。遺物は出土しておらず、埋没時期も不明であるが、SD6～9は溝間の間隔が狭いことから鋤跡と考えられる。

SD4　（第7図）

調査区北西において検出した溝である。幅45cmで深さ35cmである。遺構埋土は、上層が灰黄褐色+にぶい黄色シルト質細砂、中層が浅黄色シルト質細砂、下層が暗灰黄色シルト質細砂である。図化できる遺物は2点出土した。図7の3は土師質土器の甕の口縁部である、磨滅しているが外反気味な口縁部で端部は平坦面をもつ。4は弥生土器の甕である。外面はミガキが見られ、内面には指頭圧痕が見られる。

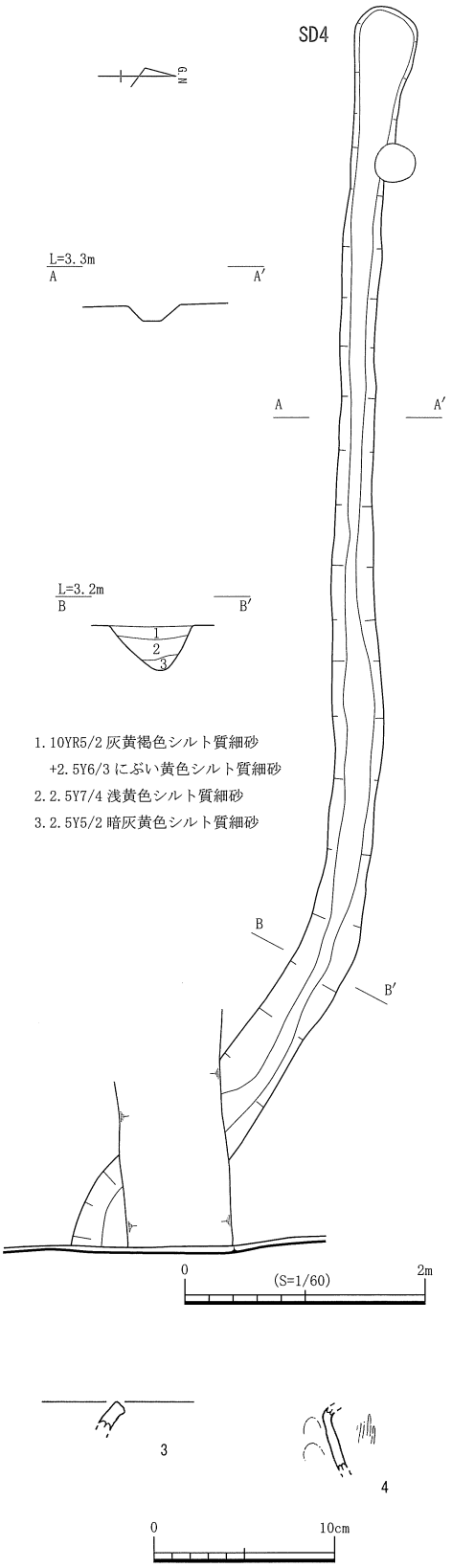
SD5　（第8図）

調査区北西において検出した溝である。幅78cmで深さ13cmである。遺構埋土は、不明である。遺物は出土していないため遺構の時期は不明である。

SK1　（第9図）

調査区北西において検出した土坑である。平面形態は、直径62cm～64cmの円形で、深さが16cmである。土坑の底面には土師質土器の甕（図10の8）が据えられていた。甕内部の埋土は、灰黄色+浅黄シルト質細砂～中砂である。

図化できる遺物は4点出土した。図10の5は備前焼の灯明皿で18世紀のものと考える。6は備前焼の擂鉢である。口縁部の断面形が三角形になり、上段に明瞭な段を持つことから17世紀中頃のものと考えられる。7は土師質土器の皿である。底部回転糸切りで、底部外縁までは切り離しが及ばず、回転ナデが認められる。また、回転ナデによって見込み中央が明瞭に凹んでいる。『高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』様相6と考えられることから、18世紀のものである。8は土師質土器の甕である。口縁部直下が「く」の字状に外反しており、口縁部が立ち上がり気味になっている。底部内面の中央部には塊状に鉄が付着している。底部が、薄く磨滅していることから繰り返し使われたと考えられる。出土遺物から18世紀の遺構と考えられる。



第7図　SD4平・断面図(S=1/60)
・遺物実測図（S=1/4）

SK2　（第9図）

調査区北西において検出した土坑である。平面形態が一辺90cm～92cmの隅丸方形で、深さが11.5cmである。遺構埋土は、褐灰色+灰黄褐色シルト質細砂である。図化できる遺物は4点出土した。図10の9は土師質土器の杯である。器壁が薄く14世紀以降のものと考えられる。10は土師質土器の杯である。口縁直下が内弯気味で、内面中位に弱い段が見受けられる。11は土師質土器の椀であ

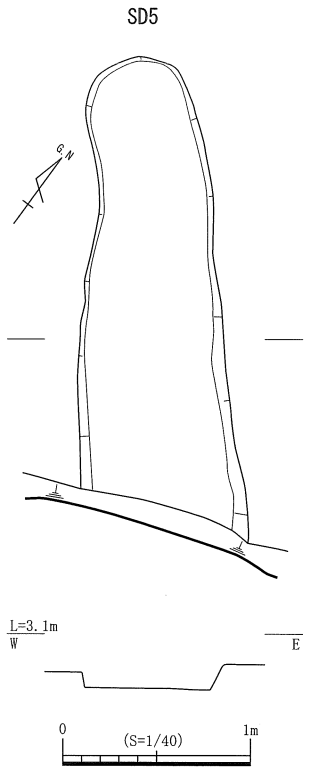
る。やや内弯する口縁下半と口縁端部が外傾気味であることから13世紀のものと考えられる。12は須恵質土器である。出土遺物から14世紀頃の遺構と考えられる。

SK4　（第9図）

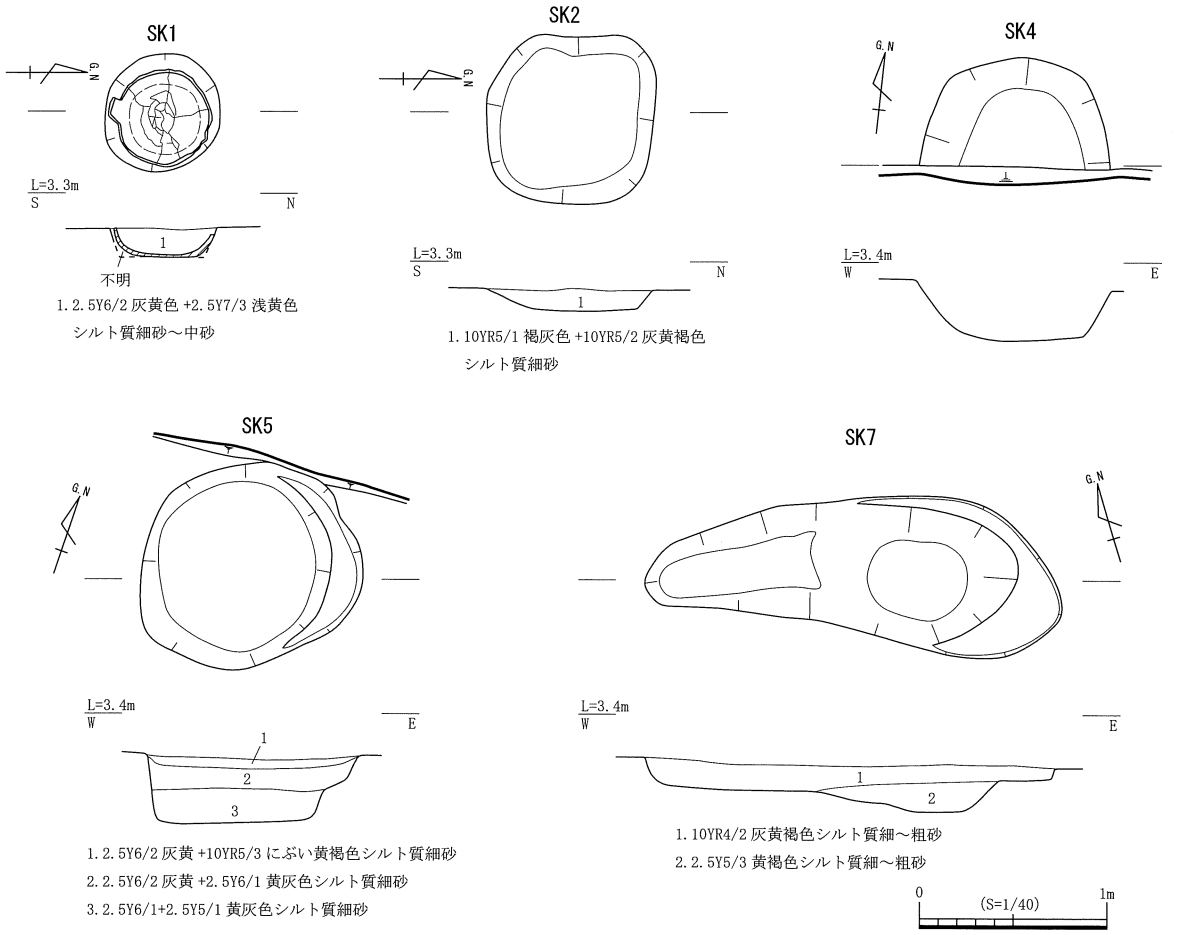
調査区北西において検出した土坑である。検出形態は、直径60cm～102cmである。深さは33.2㎝で、遺構埋土は不明である。図化できる遺物は4点出土した。図10の13は土師質土器の擂鉢である。底部及び口縁部が欠損しているため時期確定は難しいが、おろし目の条数が4本であることから、15世紀中葉～16世紀の可能性がある。14は土師質土器の皿である。体部は外傾しているが、口縁端部は直線的に内傾している。15は土師質土器の皿で内外面ともナデが施されたミニチュア土器である。16は瓦質の焙烙で、太く短い直線的な口縁部を持つことから19世紀以降のものである。出土遺物から19世紀以降の遺構と考えられる。

SK5　（第9図）

調査区北西において検出した土坑である。平面形態は、直径106cm～122cmの円形である。遺構埋土は、上層は灰黄色＋にぶい黄褐色シルト質細砂、中層は灰黄色＋黄灰色シルト質細砂、下層は黄灰色シルト質細砂である。図化できる遺物は4点出土した。図10の17は陶器の皿である。18は堺・明石系

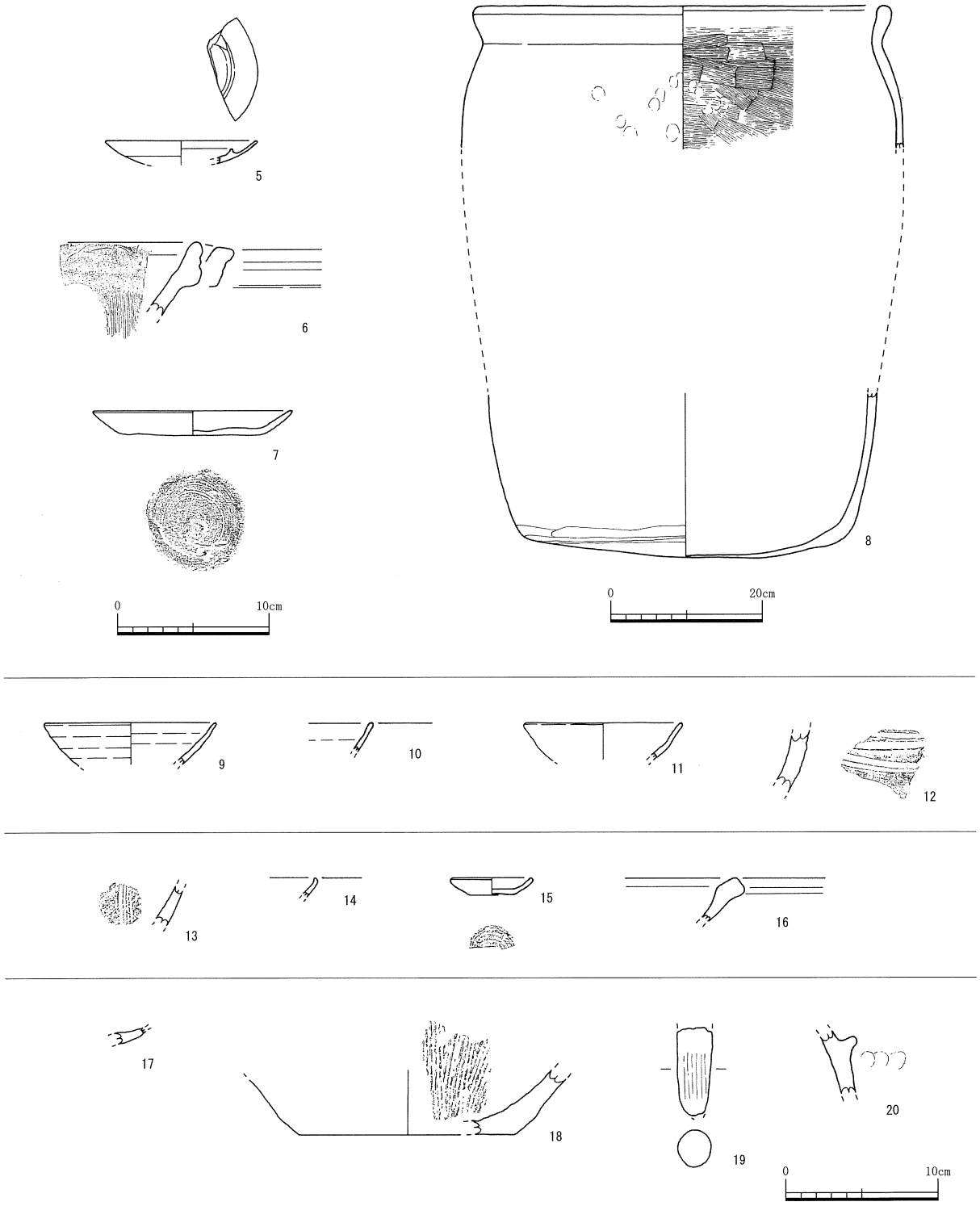


第8図　SD5 平・断面図(S=1/40)



第9図　SK1・2・4・5・7 平・断面図(S=1/40)

の擂鉢である。おろし目が密であり高台がないことから、18 世紀後半～ 19 世紀前半と考えられる。19 は土師質土器の足釜の脚部である。土師質土器の足釜は 16 世紀中葉まで存在することから、遺物の年代は 16 世紀中葉以前のものと考えられる。20 は土師質土器の足釜である。鍔部の基部が太く短く突出しており、口縁部が欠けているため判断に難しいが、鍔部より口縁部のほうが長いことから、13 世紀以降と考えられる。出土遺物から 18 世紀後半～ 19 世紀前半の遺構と考えられる。



第 10 図　SK1･2･4･5 遺物実測図（S=1/4, 8：S=1/8）

SK7　（第9図）

調査区南西において検出した土坑である。平面形態は、68cm × 220cm の楕円形で、深さは 22.5 cmである。遺構埋土は、上層は灰黄褐色シルト質細～粗砂、下層は黄褐色シルト質細～粗砂である。遺物は出土していないため遺構の時期は不明である。

SK3・6・8・9

調査区において検出した土坑である。遺物は出土していない。

ピット（SP）（第11図）

調査区において検出したその他ピットは56基を数えた。各ピットの平面形態及び埋土は、表1のとおりである。

SP1から出土した図12の21は、土師質土器の杯である。端部が尖り気味になる口縁部を持ち、口縁部下半はやや内弯する傾向が見られ、17世紀のものと考えられる。SP6から出土した22は、土師質土器の杯である。底部に糸切痕が見られる。SP10から出土した23は、土師質土器の椀の高台である。高台部は磨滅しているが、矮小化していることから13世紀後半以降のものと考えられる。SP18から出土した24は、土師質土器の皿である。口縁部が外反気味に延び、端部はやや内弯しており外側が丸く、尖り気味になっていることから、17世紀中頃のものと考えられる。SP21から出土した25は、土師質の土錘である。SP36から出土した26は、土師質土器の皿である。器壁が薄く外反気味に延び、口縁端部が尖り気味に収まることから18世紀のものと考えられる。SP39から出土した27は、土師質土器の杯の口縁部である。器壁が薄く端部は外傾している。

SP41　（第11図）

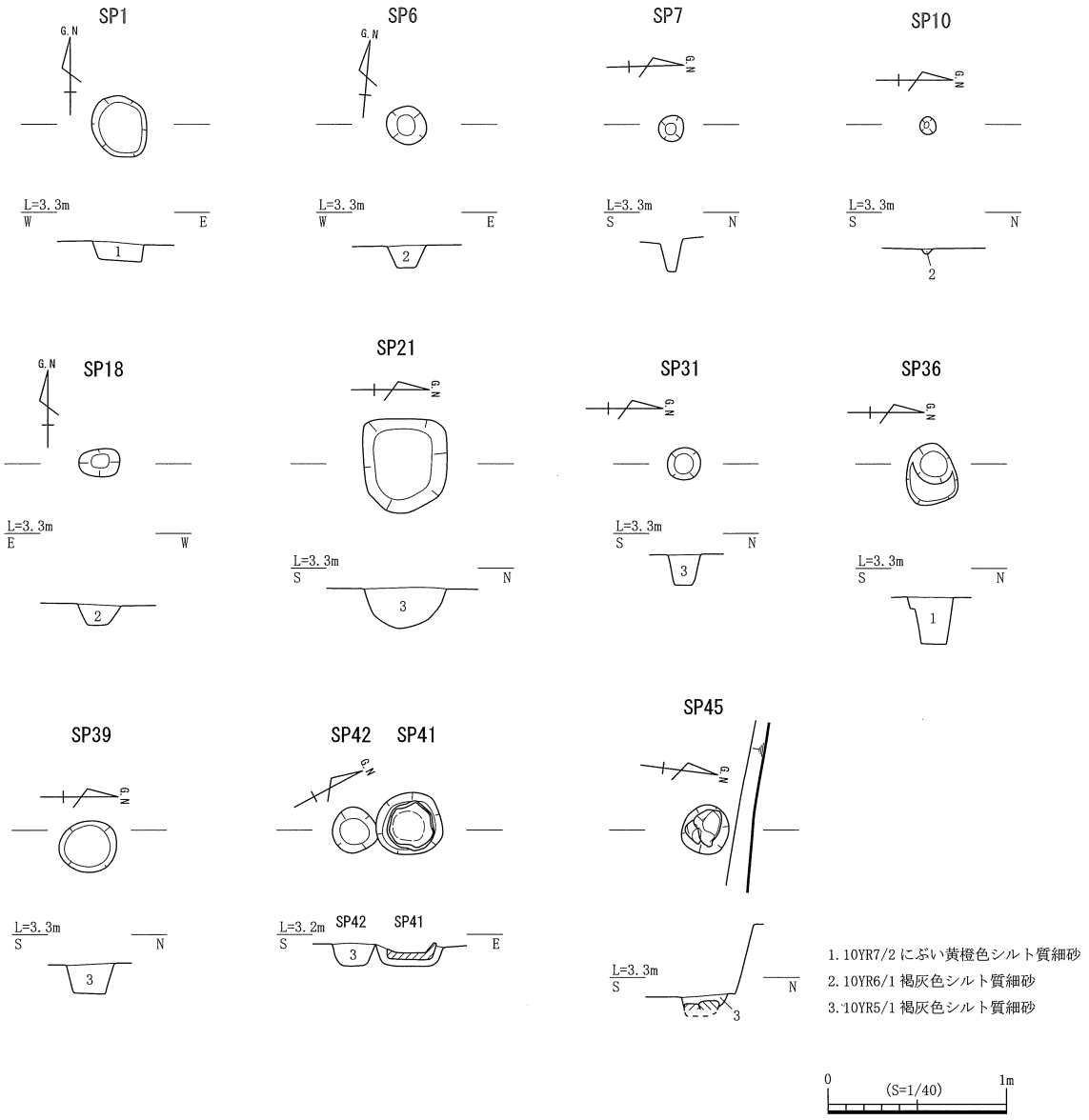
調査区中央において検出したピットである。平面形態は、直径24cm × 36cmの円形である。深さは11.7 cmである。ピットの底面より4cm浮いた状態で、図13の28の陶器の甕が据えられていた。産地は不明で時期も不明であるが、鉄釉が施されている。底面内側及び外底部には重ね焼き痕があり、外底面には「斗五升十号」と墨書が見られる。これは十号の甕で、容量が一斗五升（約27リットル）という意味と考えられる。

SP45　（第11図）

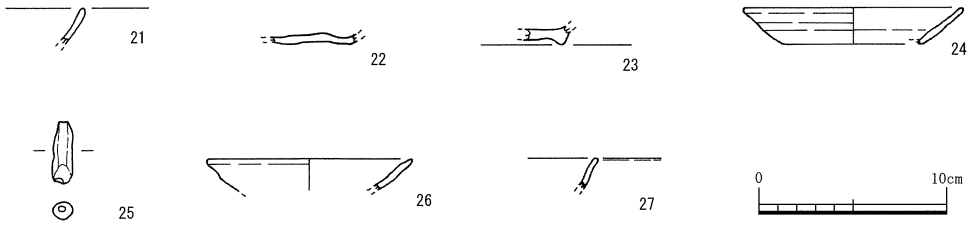
調査区北西において検出したピットである。平面形態は、直径28cmの円形である。深さは3.4 cmである。遺構埋土は、褐灰色シルト質細砂である。底面で根石を検出した。遺物は出土していない。

精査中（出土層不明）

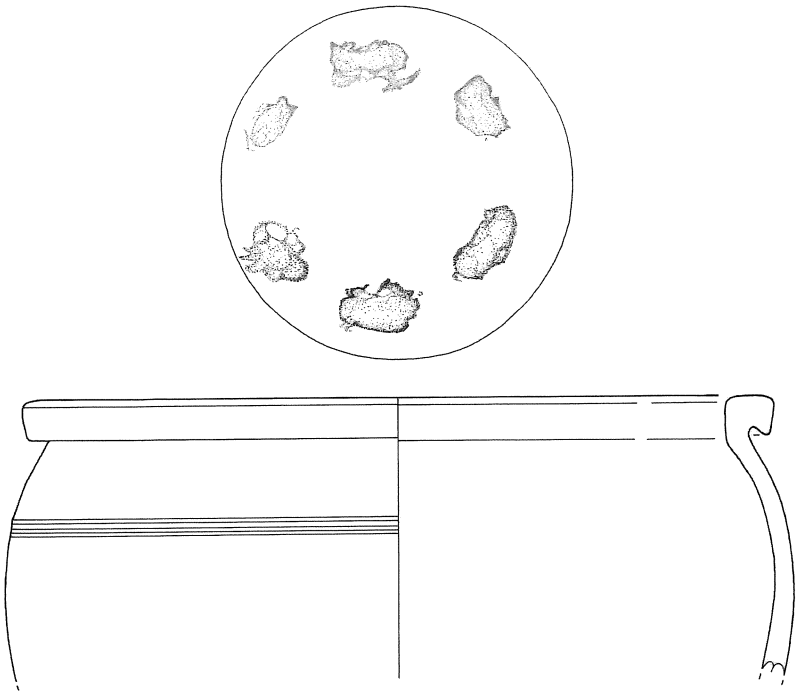
図化できる遺物は5点出土した。図14の29は弥生土器の底部で、内外面とも磨滅している。30は土師質土器の植木鉢である。31は土師質土器の目皿である。32は土師質土器の杯である。口縁部しか残存していないが、口縁部が外反気味に延びて端部が尖り気味に収まることから、『高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』 様相6　皿ＡⅦ形式と考えられ18世紀のものと考えられる。33は土師質土器の椀である。底部はヘラ切りで、平高台で見込みが窪む。

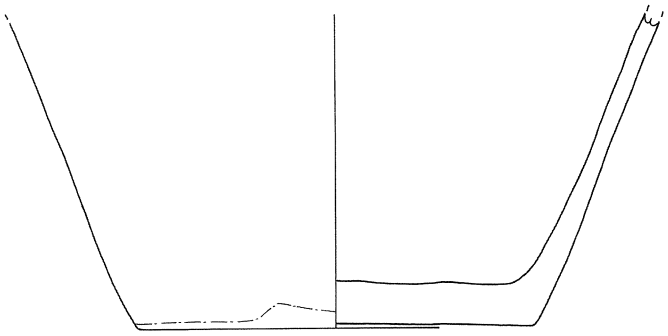


第11図　SP1・6・7・10・18・21・31・33・36・39・41・42・45 平・断面図(S=1/40)

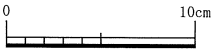


第12図　SP1・6・10・18・21・36・39遺物実測図(S=1/4)

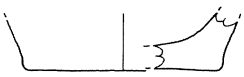




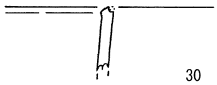
28



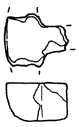
第13図　SP41 遺物実測図 (S=1/4)



29



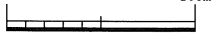
30



31

32

33



第14図　精査 遺物実測図 (S=1/4)

第１表　検出遺構一覧表

遺構番号	平面形	規模(cm)			埋土色調	備考
		長径(幅)	短径	深さ		
SA1-1	楕円形	26	20	18.8	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SA1-2	楕円形	44	24	23.0	10YR6/1褐灰色シルト質細砂	
SA1-3	円形	20	18	10.3	10YR6/1褐灰色シルト質細砂	
SA1-4	円形	24	22	15.8	10YR6/1褐灰色シルト質細砂	
SA2-1	不正正円形	50	28	17.3	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	根石あり
SA2-2	楕円形	32	30	31.5	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SA2-3	楕円形	30	22	15.2	10YR6/1褐灰色シルト質細砂	
SA2-4	円形	42	40	15.3	10YR3/1黒褐色シルト質細砂	
SD1		(180?)	21	10.2	-	
SD2		(300)	20	5.7	-	
SD3		(630)	22	3.0	-	
SD4		(1080)	45	35.0	10YR5/2灰黄褐色シルト質細砂+2.5Y6/3にぶい黄色シルト質細砂 2.5Y7/4浅黄色シルト質細砂 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質細砂	
SD5		(240)	78	13.0	-	
SD6		(20)	15	20.0	-	
SD7		(30)	25	6.5	-	
SD8		(35)	18	3.1	-	
SD9		(40)	30	3.4	-	
SK1	円形	64	62	16.0	2.5Y6/2灰黄色+2.5Y7/3浅黄色シルト質細～中砂	
SK2	隅丸方形	92	90	11.5	10YR5/1褐灰色+10YR5/2灰黄褐色シルト質細砂	
SK3	隅丸方形	(56)	(40)	19.8	-	
SK4	楕円形	(102)	(60)	33.2	-	
SK5	円形	122	106	22.8	2.5Y6/2灰黄色+10YR5/3にぶい黄褐色シルト質細砂 2.5Y6/2灰黄色+2.5Y6/1黄灰色シルト質細砂 2.5Y6/1+2.5Y5/1黄灰色シルト質細砂	
SK6	不定形	238	78	22.1	10YR5/2灰黄褐色シルト質細砂	
SK7	楕円形	220	68	22.5	10YR4/2灰黄褐色シルト質細～粗砂 2.5Y5/3　黄褐色シルト質細～粗砂	
SK8	不定形	70	42	19.5	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SK9	不定形	72	58	7.8	-	
SP1	円形	32	30	8.7	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP3	楕円形	18	12	3.2	10YR6/1褐灰色シルト質細砂	
SP4	円形	20	20	16.0	10YR6/1褐灰色シルト質細砂	
SP6	円形	21	21	11.6	10YR6/1褐灰色シルト質細砂	
SP7	円形	12	12	15.5	-	
SP8	楕円形	46	26	9.3	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP9	円形	24	22	13.0	10YR6/1褐灰色シルト質細砂	
SP10	円形	10	8	3.7	10YR6/1褐灰色シルト質細砂	
SP11	円形	22	22	13.2	10YR6/1褐灰色シルト質細砂	
SP12	円形	16	14	11.6	10YR3/1黒褐色シルト質細砂	
SP13	円形	18	14	13.5	10YR3/1黒褐色シルト質細砂	
SP17	円形	20	20	11.5	10YR6/1褐灰色シルト質細砂	
SP18	楕円	24	16	10.7	10YR6/1褐灰色シルト質細砂	
SP19	円形	46	40	12.1	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP20	楕円形	18	12	5.6	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP21	不正形	52	46	21.8	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP22	楕円形	28	22	14.7	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP23	円形	22	18	12.0	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP24	円形	28	24	4.7	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP25	楕円形	20	16	4.0	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP26	円形	38	32	17.3	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP27	楕円形	16	12	16.0	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP28	円形	32	30	10.2	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP29	円形	24	22	7.3	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP30	円形	10	10	9.4	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP31	円形	18	18	16.8	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP33	円形	24	22	16.1	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP34	円形	10	8	5.8	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP35	円形	16	16	3.4	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP36	楕円形	34	30	27.4	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP37	楕円形	34	28	16.8	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP38	不正形	78	30	9.5	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP39	円形	32	28	18.0	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP40	円形	14	12	10.7	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP41	円形	36	34	11.7	-	
SP42	円形	26	24	12.7	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP44	楕円形	24	20	7.1	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP45	円形	28	28	3.4	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	根石あり
SP46	円形	38	32	9.2	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP47	楕円形	34	32	16.9	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP48	円形	16	14	8.5	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP49	楕円形	16	14	15.5	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP50	円形	14	14	12.0	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP51	円形	22	22	22.5	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP52	楕円形	22	22	20.0	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP53	円形	18	16	12.0	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP54	楕円形	24	16	9.0	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP55	円形	18	16	12.6	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP56	円形	14	14	10.8	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP57	円形	22	20	13.8	10YR5/1褐灰色シルト質細砂	
SP58	円形	(30)	(12)	17.1	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP60	楕円形	12	10	16.8	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP61	円形	12	12	6.5	10YR7/2にぶい黄橙色シルト質細砂	
SP62	楕円形	40	34	25.1	2.5Y6/3にぶい黄色+2.5Y7/1灰白色シルト質細～粗砂	
SP63	楕円形	36	30	14.6	2.5Y6/3にぶい黄色+2.5Y7/1灰白色シルト質細～粗砂	
SP64	楕円形	24	22	19.0	2.5Y6/3にぶい黄色+2.5Y7/1灰白色シルト質細～粗砂	
SP65	円形	52	50	7.4	-	
SP66	円形	(20)	(10)	4.1	-	
SP67	円形	(16)	(14)	5.5	-	

第２表　出土遺物観察表

報文番号	出土遺構名	種類	器種	法量(cm)(推定値)[残存高]			文様・調整		色調		胎土	焼成	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
1	SA1-1	土師質土器	甕	—	—	[3.5]	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	普　石英長石赤色粒含む	良	
2	SA1-2	土師質土器	皿	(7)	(6.25)	1.1	ナデ	ナデ	10YR8/4浅黄橙	7.5YR8/6浅黄橙	普	良	
3	SD4	土師質土器	甕	—	—	[1.6]	磨滅	磨滅	5YR6/8橙	10YR8/2灰白	粗　石英長石含む	良	
4	SD4	弥生土器	甕	—	—	[3.2]	ナデ・ミガキ	ナデ・磨滅・指頭圧痕	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	普　石英長石含む	良	
5	SK1	陶器(備前焼)	灯明皿	(10)	—	[1.5]	回転ナデ・ヘラケズリ後塗土	ナデ	10YR2/2黒褐	2.5YR3/3明赤褐色	密　長石黒雲母含む	良好	
6	SK1	陶器(備前焼)	擂鉢	—	—	[4.85]	ナデ	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐	7.5YR4/4褐	普　石英長石含む		おろし目有
7	SK1	土師質土器	皿	(13)	—	[1.6]	ナデ・底部糸切痕	ナデ	10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	普	良	
8	SK1	土師質土器	甕	(53)	(42)		ナデ・ヘラナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	普　石英長石含む	良	底部に鉄付着
9	SK2	土師質土器	杯	(11.2)	—	[2.7]	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/4にぶい橙/10YR8/3浅黄橙	5YR7/4にぶい橙/10YR8/3浅黄橙	普	良	
10	SK2	土師質土器	杯	—	—	[1.9]	ナデ	ナデ	10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	普	良	
11	SK2	土師質土器	椀	(10.4)	—	[2.4]	ナデ	指オサエ後ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/2灰白	普	良	付着物有
12	SK2	須恵質土器		—	—	[4]	ナデ・工具痕	ナデ	N6/　灰	N5/　灰	普　石英長石含む	良	
13	SK4	土師質土器	擂鉢	—	—	[3.2]	ナデ		10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	普　石英長石含む	良	おろし目有
14	SK4	土師質土器	皿	—	—	[1.3]	ナデ	ナデ	5YR7/6橙	5YR7/6橙	普	良	
15	SK4	土師質土器	皿	(5.2)	(3)	1.1	回転ナデ	回転ナデ	2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙	普　石英長石含む	良	
16	SK4	瓦質土器	焙烙	—	—	[2.8]	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	5Y5/1灰	10Y6/1灰	普　石英長石含む	良	
17	SK5	陶器	皿	—	—	[1.05]	ナデ・ヘラケズリ・施釉	ナデ・施釉	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	普	良	
18	SK5	陶器	擂鉢	—	(14)	[4.25]	回転ナデ		2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	粗　石英長石含む	良	おろし目有
19	SK5	土師質土器	足釜	—	—	5.6	工具痕		10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	普　石英長石含む	良	横幅2.3cm厚み2.15cm
20	SK5	土師質土器	足釜	—	—	[4.35]	ナデ・磨滅・指頭圧痕	ナデ・磨滅	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	粗　石英長石含む	良	
21	SP1	土師質土器	杯	—	—	[1.9]	ナデ	ナデ	10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	普	良	
22	SP6	土師質土器	杯	—	—	[0.6]	回転糸切後に板目痕	ナデ	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	普　石英長石赤色粒含む	良	
23	SP10	土師質土器	椀	—	—	[1]	磨滅	磨滅	2.5Y8/4淡黄	2.5Y8/4淡黄	普　石英長石含む	良	
24	SP18	土師質土器	皿	(11.4)	(7.5)	1.9	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	普　石英長石赤色粒含む	良	
25	SP21	土師質土器	土錘	1.1	—	[3.25]	指オサエ・ナデ		2.5Y7/2灰黄		普	良	
26	SP36	土師質土器	皿	(10.8)	—	[1.7]	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/6橙	5YR7/6橙	普　黒色粒含む	良	
27	SP39	土師質土器	杯	—	—	[1.65]	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	10YR8/3浅黄橙	10YR8/2灰白	普　石英長石含む	良	
28	SP41	陶器	甕	(40)	20.9	[39.3]	施釉・ヘラナデ	施釉・砂目	2.5Y7/1灰白・(底) 2.5Y7/2灰黄	(釉) 5YR4/6赤褐・N1.5/0　黒	微	良	底面に「斗五升十号」の墨書・底部内外面に重ね焼痕・外面に鉄釉
29	精査	弥生土器	壺	—	(10)	[3]	磨滅	磨滅	5YR6/8橙	2.5Y8/3淡黄	粗　石英長石含む	良	
30	精査	土師質土器	植木鉢	—	—	[3.4]	ナデ	ヨコナデ	5YR7/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	普　石英長石赤色粒含む	良	
31	精査	土師質土器	目皿	—	—	2.7	ナデ	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	普　石英長石含む	良	横幅3.2cm・厚さ2cm
32	精査	土師質土器	杯	—	—	[2]	ナデ	ナデ	10YR8/4にぶい黄橙	10YR8/4にぶい黄橙	普	良	
33	精査	土師質土器	椀	—	(5.4)	[1.65]	回転ナデ・底部ヘラ切痕	回転ナデ	2.5Y8/3淡黄	2.5Y7/2灰黄	普　石英長石含む	良	

第４章　まとめ

第１節　発掘調査結果

発掘調査結果から、柵列及びピット・土坑・溝などの遺構を検出することができた。中世の遺構としてはSK2が挙げられる。近世の遺構としては埋没年代が不明ではあるが、柵列であるSA1及びSP2･SK1･SK4が挙げられる。SD1･2･3は区画溝とも考えられるが、遺物が無いため時期及び詳細は不明である。SD4やSK7は埋没時期の確定ができないが、埋土状況から他の遺構とは時期が異なる可能性がある。

精査において弥生土器や中世の遺物が出土しており、一部中世の遺構も見られることから中世以前の遺構が存在したと考えられるが、中世以前の遺物を含む遺構が極端に少なく、大半は近世と考えられる遺構を多く検出した。これは、当該地区が海浜部に位置することから、地山が砂層であり堆積層が少なく地盤が軟弱であり、現代においても土壌を削平し造成土を入れたり、土壌改良による撹乱が行われている。近世にも中世段階までの地表面を削るなどの行為がなされたと推察できることから、中世以前の遺構が希薄であったと考えられる。

第２節　香西浦復元案から考える平賀下遺跡

調査地は、高松城下から延びる丸亀街道が近くに通り北隣に萬徳寺が、西には香西寺が所在するなど寺社仏閣が多く古い町並みの残る場所に立地している。中世段階には香西には香西浦という港があったとされる。

この港については、『兵庫北関入舩納帳』にも記載がある。『兵庫北関入舩納帳』は、東大寺が管轄する兵庫津の北に設けられた関への入船及び関銭賦課の記録であり、文安２年（1445）一年限りの記述ではあるが、中世段階の西日本の交易をうかがい知ることができる文献史料である。香西については九月十三日に「赤米十五石・米廿五石・・(略)」等の記録がみられる。

『港町の原像－中世港町・野原と讃岐の港町－』の香西浦復元案（北山 2007）では、萬徳寺の北東から長安寺の間が入江状となることが想定されており、現状も萬徳寺の北東に通る県道16号線より北は土地が低くなっており、この辺りが入江であると考えられる。

『讃岐国名勝図会』によると、萬徳寺は「当寺は文禄年中建立し、法持坊と号し･･･(略)」とある。文禄年間（1593～1596年）に建立されたとある一方、矛盾が生じるが同じ『讃岐国名勝図会』の「元亀天正年間（1570～1593年）香西浦図」には、法持坊（萬徳寺）が存在し、その場所は入江状に陸地化している。

これらのことを踏まえると本調査地は、香西氏の本拠地であった藤尾城の北西に位置し、中世における香西の港があった海浜部近くの陸地化した場所であることから、中世にはすでに当該地は土地利用がなされ、文禄年間に建立されたと伝わる萬徳寺の門前にあたることから、それ以降も土地利用がされていたと考えられる。

＜参考文献＞

香西成資　1663『南海治乱記』 1719『南海通記』
1445『兵庫北関入舩納帳』
梶原藍水　1853『讃岐国名勝図会』
梶原猪之松　1930『古今讃岐名勝図絵』
香川県教育委員会　1992『川津元結木遺跡』
佐藤竜馬・濱野圭治　1995「近世讃岐における土器生産」『財団法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅲ』 香川県埋蔵文化財センター
香川県教育委員会　1995『国分寺楠井遺跡』
香川県教育委員会　2000『空港跡地遺跡Ⅳ』
岡山市教育委員会　2002『岡山城三之曲輪跡』
香川県教育委員会　2003『高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ・Ⅲ』
香川県教育委員会　2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』
香川県教育委員会　2004『浜ノ町遺跡』
北山健一郎　2007「中世港町の地形と空間構成」『港町の原像－中世港町・野原と讃岐の港町－』四国村落遺跡研究会
白石朋世　2008「備前焼灯明皿考」『備前歴史フォーラム　江戸時代の暮らしと備前焼』備前市教育委員会　備前市歴史民俗資料館
備前市教育委員会　2013『備前窯詳細分布調査報告書』

遺物は、以下の先行研究の編年案を参照した。

『研究紀要Ⅲ』、『国分寺楠井遺跡』、『空港跡地遺跡Ⅳ』、『高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ・Ⅲ』の佐藤竜馬氏の土器編年案（佐藤 1995、2000、2003）及び『川津元結木遺跡』の片桐孝浩氏の分類案（片桐 1992）に準拠する。

備前焼については、『備前窯詳細分布調査報告書』(2013) 及び『岡山城三之曲輪跡』の乗岡実氏の分類案（乗岡 2002）及び『備前歴史フォーラム　江戸時代の暮らしと備前焼』の白谷朋世氏の案（白谷 2008）を参照した。

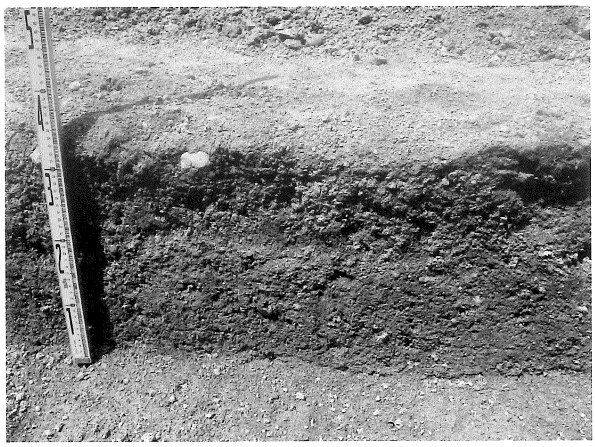
写真図版1

調査区全景（東から）

調査区全景（西から）

写真図版2

土層壁面 A-A′

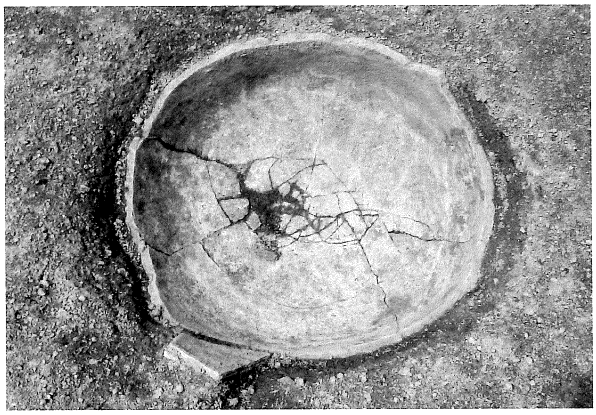


土層壁面 B-B′

SA1・SA2 完掘状況

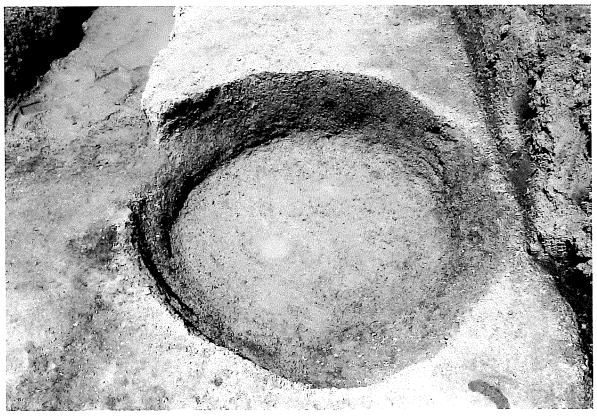
SA2-1 完掘状況

SD4 完掘状況

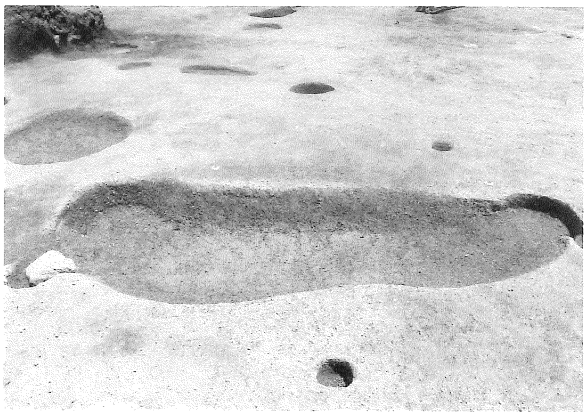


SK1 完掘状況

SK2 半裁検出状況



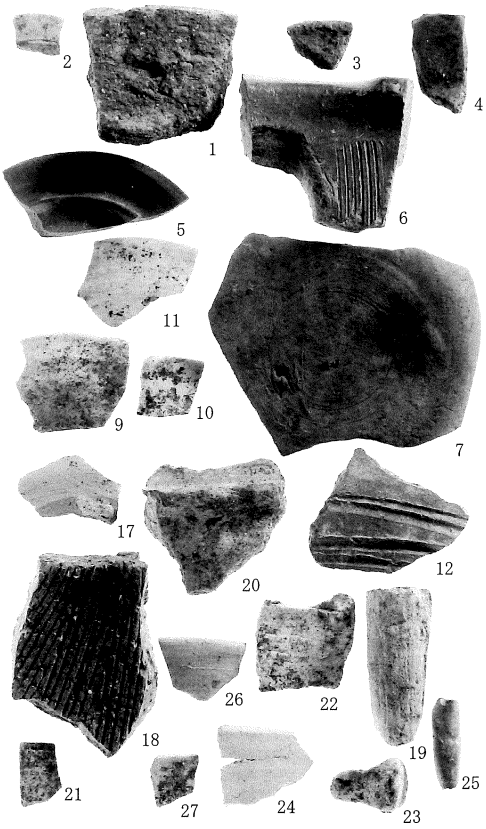
SK5 完掘状況



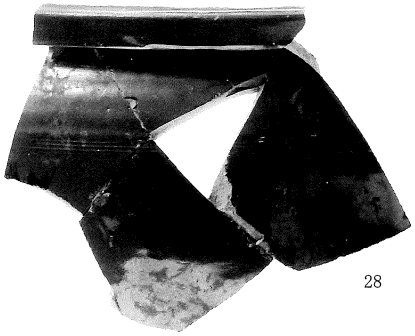
SK6 完掘状況

SP41 完掘状況

SP45 完掘状況



遺物写真 1



遺物写真 2

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひらがしたいせき
書名	平賀下遺跡
副書名	香西分団消防屯所整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第165集
編著者名	杉原　賢治・高上　拓・中西　克也
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　　TEL087－839－2660
発行年月日	2015年12月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘 面積	発掘 原因
ひらがしたいせき 平賀下遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 こうざいきたまち 香西北町	37201		34° 20′ 52″	133° 59′ 43″	2014.7.14 ～ 2014.7.25	250㎡	香西分団消防屯所整備

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
平賀下遺跡	集落跡	中世 近世	ピット 柵列 土坑 溝	弥生土器 土師質土器 須恵質土器 陶器	

要約	平賀下遺跡は本津川河口近く、勝賀山東麓の海浜部に位置する遺跡である。今回の調査では、中世と近世以降の2期にわたる遺構・遺物を検出した。中世の遺構としては土坑、近世以降の遺構としては、柵列等が確認できた。 これにより、香西地区における中世から近世時期の集落の一部が確認できた。

香西分団消防屯所整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平賀下遺跡

平成27年12月22日

編集/発行　高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号

印　　刷　有限会社　中央ファイリング